

第 61 回舞踊学会シンポジウム

「クロスオーバーする身体が拓く新たな地平」

日時 12月5日(土) 14:00~17:00

会場 筑波大学・大学会館ホール

《趣 旨》

グローバル化が加速し、その破綻の予兆さえ見せ始めた現在の世界において、生身の「身体」への可能性が改めて注目されている。こうした状況にあって、舞踊は、「身体」を共通項に、関連芸術、スポーツ、医療や福祉といった様々な領域との新たな交流・融合が広がっている。本シンポジウムでは、《ダンス・身体・クロスオーバー》の3つをキーワードに、芸術と体育・スポーツ、文化と教育、理論と実践、また、それ以外の異なったジャンルやジェンダーの問題等をも含めて、多様な領域が交錯する地平から、「身体」が拓く新たな可能性を探求する。

コーディネーター・司会：村田 芳子（筑波大学人間総合科学研究科教授・体育）

1. サーカス —異種・異物陳列のスペクタクルを巡って—

講師 石井 達朗（慶応義塾大学名誉教授）

曲芸や動物芸と呼ぶものは、遠く紀元前からあったが、近代サーカスの誕生は、1770年ごろ、イギリスのフィリップ・アストレイが円形のリングで曲馬を見せたことに始まる。約100年後、アメリカのP・T・バーナムは、それまでやっていた畸形見世物に、移動動物園・曲馬ショーなどを加えて大サーカス団をつくる。サーカスは当初より、異種・異物陳列のスペクタクルとして出発したのである。そのスペクタクルは20世紀にどのような道をたどるのか。

2. 越境するパフォーマンスアートと身体

講師 逢坂 卓郎（筑波大学人間総合科学研究科教授・芸術）

出来事、場所、テーマを重視する芸術に於ける身体表現と、動きと身体自身の美を追求してきた舞踊との境界で、発表を続けてきた自身の作品を通して、動きを伴う表現の可能性について考察する。また、30年以上の歴史を持つ筑波大学芸術の「パフォーマンス演習」の中から、学生達の実験的な作品による多様な提案を紹介し、越境するパフォーマンスアートと身体について考える。

3. ダンサーが自らの身体に課すこと

講師 平山 素子（筑波大学人間総合科学研究科准教授・体育）

あらゆる表現に直ちに反応できる能力を備えていることを要求されるダンサーたちは、身体にある種の抑制をかけ、日々研ぎ澄まします。その先にある自由な表現の域にどのように到達するのか。踊る身体、表現する身体、その具体的内容や精神状態をダンサーの立場からお話します。

4. ダンス文化と教育をつなぐ—ジェンダーを乗り越え、“今”を切り拓くダンス教育

講師 片岡 康子（早稲田大学大学院客員教授・お茶の水女子大学名誉教授）

長年、「学校ダンス校門を出ず」、「女・子どものダンス」などと風評されてきたダンス教育は、平成元年以降、1. ダンス文化と教育をつなぐ、2. ジェンダーを乗り越える、という二つの視点から見直しが行われ、平成10年度の改訂では初めて「リズム系ダンス」が主内容に加わり、平成20年度の改訂では中学校1-2年まで男女必修となった。こうした大転換を踏まえながらダンス教育の新たな可能性を考えてみたい。